

出生早期ワクチン開始予防法の検討

矢野右人 八橋 弘 古賀満明 井上長三

〈要約〉 生後 7 日以内にワクチンを開始しても、標準方式と同等の予防効果がえられた。

〈見出し語〉 出生早期ワクチン開始 母子感染予防

〈研究方法〉

HB_e抗原陽性のキャリアー妊婦より出生した児 274 名に生後 7 日以内に血液由来ワクチン (PHB ワクチン) 10 μg を接種し、生後 1、3 カ月目に同量を追加した。274 名中 110 名は HBIG 1ml を生直後に 1 回、113 名は HBIG 1ml を生直後と 3 カ月目の 2 回投与した。HB_s 抗原、HB_s 抗体は、RIA 法を用い、S/N 比 2.1 以上を陽性とした。HBV キャリアー化は観察最終時点で HB_s 抗原が陽性の例とした。

〈結果〉

キャリアー移行例は 274 名中 13 名 (4.7%) であり、当院で生後 3 カ月より血液由来ワクチンで実施した予防例のキャリアー移行率 4.2% (868 例中 37 例) と同等
国立長崎中央病院臨床研究部

であった。キャリアー移行例 13 名のキャリアー成立時期に関しては、9 名は生後 3 カ月までにキャリアー化していた。残りの 4 名は生後 6 カ月以降にキャリアー化しており、HBIG の投与回数でその 4 名を分けると生後 3 カ月までの HBIG 1 回投与例で 2 名、2 回投与例で 2 名と同数であり、HBIG の投与回数がキャリアー移行例へ及ぼす影響は見られなかった (図 1、図 2)。

〈考察〉

現在行われている母子感染予防事業は、HBIG を 2 回、HB ワクチンを生後 2 カ月より 3 回投与している。生後 7 日以内にワクチンを投与した場合を検討したが、生後 7 日以内に HB ワクチンを開始した群と生後 3 カ月より HB ワクチンを開始した群とでは、ともに 4% 台のキャリアー移行例で予防効果に差は見られなかった。

HBIG 1回投与と2回投与とではHBIGの投与回数がキャリア移行例に及ぼす影響は見られず、HBIG 1回投与で十分な予防効果が期待できる。以上より出生早期にワクチン開始することで、従来と同等のキャリア

予防効果でHBIG 1回投与が可能となり、また生後3カ月までにワクチン接種を終了するなど、方法論が簡潔になるばかりでなく児に対する負担も軽減されると思われた。

図1

HBV母子感染各種予防法別キャリア移行率

	症例数	キャリア移行例 (%)
a群 HBIG+PHBワクチン (血液由来ワクチン) 6ヶ月開始	91	8 (8.8)
b群 HBIG+PHBワクチン 3ヶ月開始	868	37 (4.2)
c群 HBIG+PHBワクチン 生後7日以内開始	274	13 (4.7)
d群 HBIG+YHBワクチン (酵母由来ワクチン) 2ヶ月開始	237	7 (3.0)
合計	1470	65 (4.4)

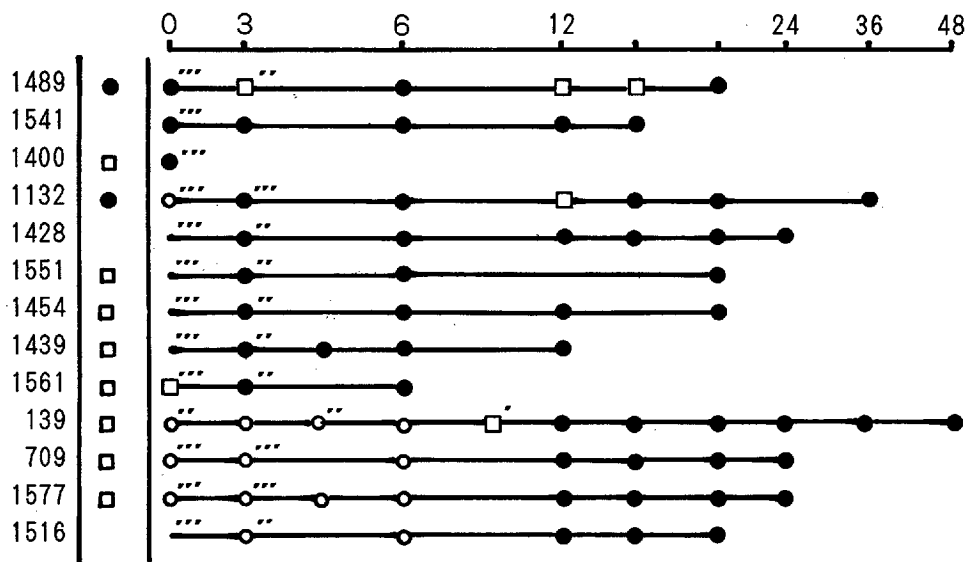
図2

キャリア移行例

(能動免疫0ヶ月開始)

(● : HBsAg+ ○ : HBsAb+ □ : Ag-Ab-)

(' : HBIG '' : vaccine ''' : HBIG+vaccine)





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 生後7日以内にワクチンを開始しても、標準方式と同等の予防効果がえられた。